日本と台湾の架け橋「李登輝物語」

最終回

講談師　一龍斎貞花

「台湾は我が領土」と強硬姿勢をも辞さない態度の中国。

中国から目の仇にされた李登輝さん健在ならば、どんな対応をなされることでしょう。

李登輝物語最終回、おつき合い下さい。

２００１年、平成13年４月、李登輝は心臓病治療のため倉敷の病院へ。

当初日本は、「李の訪日は政治目的だ」と、抗議した中国政府への配慮からビザ発給をしぶっていたが、日本と台湾の窓口である交流協会台北事務所がビザを申請、国交があれば大使館です。さまざまな混乱もありましたが、来日し治療を受けることが出来ました。

翌年の２００２年、慶応大学の学園祭で講演を依頼されたが、日本政府、外務省が中国への配慮からビザ発給を拒否。

来日出来なかった李は、講演予定だった、尊敬する新渡戸稲造と、戦前民政局長として台湾の発展に寄与した後藤新平についてふれ、そして東洋一の烏山頭ダムを造ってくれた八田與一の功績を紹介した原稿「日本人の精神」が、産経新聞国際欄に掲載されました。

この年の８月、台湾で日本人による日本李登輝友の会が設立されました。

２００３年、「もはや、中華民国は存在しない」と発言して、台湾独立の意志を明らかにします。

登輝さんは、

「靖国問題は、中国とコリアが作ったおとぎ話。尖閣諸島は沖縄県に属する日本固有の領土。日本は中国に譲歩する必要はない」

と、日本国民が願い、歯ぎしりしていることを発言されたのです。

和牛の良さをご存知で、日本から持ち込まれた源興牛を改良して育てられ、２０２２年２月、晩年心血を注がれたブランド「源興牛」を提供するレストランが台北にオープンし大盛況。

東日本大震災にわずか２３５０万人の台湾から２５０億円の義援金が、その中にはお小遣いを出してくれた子供の寄付もあり、震災からわずか５日後の３月16日、茨城の大洗町で台湾の慈済基金会日本支部の人たちが、トラックと自家用車を連ねて訪れ、被災地の人々に温かい料理を振るまってくれました。台湾地震の時の救助隊派遣や、義援金に対する返礼もありましたが、日本相手でなかったら、これほどの義援金は集まらなかっただろうといわれます。

平成19年５月、初めてノービザで来日、松尾芭蕉の奥の細道を散策、松島の瑞巌寺境内に李登輝夫妻の句碑が建てられ除幕式に出席。

６月第一回後藤新平賞受賞。尊敬する後藤新平賞は本当に嬉しく各地で講演を続け、６月７日兄が祀られている靖国神社に念願の初参拝。日本人と台湾人３００人が日の丸の小旗を振って「万歳、万歳」と歓声を上げて出迎えました。

「父が、兄の戦死を受け入れなかったため位牌もお墓もありません。靖国神社が兄を祀ってくれているんです。そして日本兵として出征し命を落とした３万人の戦亡者のためにも」と、涙を流して昇殿参拝。

「62年の歳月を経てようやく兄と再会出来た」と、涙を浮かべました。

登輝が、兄登欽と最後に写した写真が、靖国神社遊就館に飾られています。中国、靖国の横槍に屈し、日本の総理が参拝しない靖国神社に参拝されたのです。

日本の歴史を日本の若者に講演

２００９年、東京青年会議所と武士道協会共催による講演で各地を廻り、東京では「坂本龍馬の船中八策に基づいた、私が日本の若い皆さんに伝えたいこと」を語るなど、台湾人の李登輝さんが、日本の歴史に基づいて若者に話されたのです。

「日本人の心を忘れるな」

とのお心だったのでしょう。

登輝さんは、龍馬ファンで台湾龍馬会の会長をされていたほどです。

東京龍馬会で、「天翔ける坂本龍馬」と講演の中で登輝さんの龍馬への心を紹介、大変喜ばれました。東京龍馬会の会長は湾生、台湾生れの方です。

２０１５年には、台湾総統経験者として、はじめて衆議院第一会館にて講演、国会議員４割を超える２９２人が出席。

日本の高校の修学旅行先は、コロナ以前ダントツで台湾旅行だったんです。参加した高校生の多くが親日に感激するのです。

台湾に桜を植える、日本人の会がいくつもあります。

２０１８年、夫人を伴って沖縄へ９回目の訪問、この時95歳。医師や家族が高齢を心配して反対するも、

「沖縄の慰霊祭に行かねばならぬ」

と、周囲を押し切って糸満市の平和記念公園で行われた、台湾出身戦亡者慰霊祭に参列され、

「日台は、運命共同体である」

と話され、そこには沖縄の現状をよくお判りになっておられればこその発言でした。

「誇りあれ日本よ、李登輝沖縄全記録」の中で、「金銭の遊びにおいて、私的に金を儲けるのは間違いです」と、渋沢栄一さんと同じ金銭感覚です。

戦後台湾の教育は、国民党政権のもと学校で、

「正々堂々中国人になれ、小・中学生に古代からの中国皇帝の名前を総て暗記させ、日中戦争を戦った反日教育」が続けられていた。

これに対し登輝は、

「台湾の歴史・地理・自分のルーツなどを学校教育に取り入れなければいけない」

と、97年から採用された歴史教科書で若い世代の台湾の人たちの、対日理解が大きく変わり親日になったのです。

しかし、高雄など中国政府の政策で、中国人観光客の激減により、中国を大事にしなければという気風も残っています。

現在日本の貿易額もトップで、中国中心の交易の企業は親中やむなしです。

２００４年２月、登輝さんはじめ約２００万人が台湾の北から南まで約４９０キロの距離を手をつないで人間の鎖を作り、中国の弾道ミサイルから台湾を守ろうという行動でした。今やアメリカを凌ぐ経済大国に正々堂々と立ち向かわれました。

中国の税関当局は、２０２１年２月26日、台湾産パイナップルから害虫が確認されたとして３月１日から輸入禁止。台湾にとって中国はパイナップル最大の輸出先で97％中国向け。これも中国の嫌がらせと、日本は台湾パイナップルを大量に輸入、今も果物店の店頭に並んでいます。

「自分の国は、自分で守らなければいけない。そのため死ぬのは怖くない」と言われた李登輝さん。

２０２０年７月30日、李登輝さんは97歳の長寿で帰らぬ旅路におもむかれました。葬儀の時、「千の風になって」が流れていました。

奥さんは、「故郷の台湾を愛する根っからの台湾人」と、夫を称しました。お墓は、台北市に近い新北市の山の中腹にお眠りになっています。

経済大国となった日本の中国、韓国への対応に、

「日本よ強くなれ、私は22歳まで日本人でした。それが誇りです」と、日本の心を有した古武士を思わせる凛とした姿の李登輝さん。信念を持って台湾の民主化を推し進め、日本人以上に日本の心を持ち日本を愛し、日本と台湾の架け橋となった「李登輝物語」、これをもって最終回と致します。